

光子の「 $E = c|p|$ 」は量子論の関係式ではない？

高校物理の教科書的には（特殊相対論という表現こそ出てこないが、内容としては）アインシュタインは質量をもたない光の粒子，光子を仮定し，自らが導いていた粒子のエネルギー  $E$  と運動量  $p$  の相対論的關係式

$$E = \sqrt{(mc^2)^2 + (cp)^2} \quad (1)$$

を適用したという筋書きになっている。質量をもたない ( $m = 0$ ) 光子の概念を初めて導入したという意味では確かに「量子論的」であるが、実は、この光（電磁波）のエネルギーと運動量の関係は、相対論以前の古典電磁気学，Maxwell 方程式の段階で出てくることなのである。

エネルギー流密度 電荷・電流のない真空中の電磁場を考える。電磁場のエネルギー密度

$$u = \frac{\epsilon_0}{2} \mathbf{E}^2 + \frac{\mu_0}{2} \mathbf{H}^2 \quad \left( = \frac{EH}{c} : \text{電磁波の場合} \right) \quad (2)$$

の時間変化に対して Maxwell 方程式

$$\epsilon_0 \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} = \nabla \times \mathbf{H}, \quad \mu_0 \frac{\partial \mathbf{H}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E} \quad (3)$$

を適用すれば，連続の方程式の形

$$\frac{\partial u}{\partial t} = \mathbf{E} \cdot (\nabla \times \mathbf{H}) - \mathbf{H} \cdot (\nabla \times \mathbf{E}) = -\nabla \cdot (\mathbf{E} \times \mathbf{H}) \quad (4)$$

に書くことができる。ここで

$$\mathbf{J} = \mathbf{E} \times \mathbf{H}, \quad |\mathbf{J}| = EH \quad (= cu) \quad (5)$$

を Poynting ベクトルといい，エネルギー流密度を与えることがわかる。<sup>1</sup>

運動量密度 さらに，新たなベクトル

$$\mathbf{g} = \mathbf{D} \times \mathbf{B} = \epsilon_0 \mathbf{E} \times \mu_0 \mathbf{H} = \frac{\mathbf{J}}{c^2}, \quad |\mathbf{g}| = \frac{|\mathbf{J}|}{c^2} \quad \left( = \frac{u}{c} \right) \quad (6)$$

を導入する。以下で見るように  $\mathbf{g}$  は運動量の密度を表す。電磁波の場合に成り立つ  $u = c|\mathbf{g}|$  を，何らかの「粒子の集団」で成り立つ関係と見なせば，構成粒子に対して標記の関係式「 $E = c|p|$ 」が要請されることになる。

エネルギー密度のときと同様にして， $\mathbf{g}$  の時間微分に Maxwell 方程式を適用すれば

$$\frac{\partial \mathbf{g}}{\partial t} = (\nabla \times \mathbf{H}) \times \mu_0 \mathbf{H} - \epsilon_0 \mathbf{E} \times (\nabla \times \mathbf{E}) \quad (7)$$

となる。ここで，簡便記号  $\partial/\partial x = \partial_x$  etc. で書くことにして

$$-[\mathbf{E} \times (\nabla \times \mathbf{E})]_x = -E_y(\partial_x E_y - \partial_y E_x) + E_z(\partial_z E_x - \partial_x E_z) = (\mathbf{E} \cdot \nabla) E_x - \frac{1}{2} \partial_x E^2 \quad (8)$$

さらに， $\nabla \cdot \mathbf{E} = 0$ （電荷無し）を用いれば， $(\mathbf{E} \cdot \nabla) E_x = \nabla \cdot (E_x \mathbf{E})$  だから

$$-[\mathbf{E} \times (\nabla \times \mathbf{E})]_\alpha = \sum_\beta \partial_\beta \left( E_\beta E_\alpha - \frac{1}{2} E^2 \delta_{\beta\alpha} \right) \quad (\alpha, \beta = x, y, z) \quad (9)$$

$\mathbf{H}$  についても同様である。

<sup>1</sup>  $c$  を含む表式以外は，電磁波でない場合にも適用される。例えば円柱導体を流れる定常電流系  $\mathbf{j} = \sigma \mathbf{E}$ 。

Maxwell 応力テンソル 対称テンソル

$$T_{\beta\alpha} = \epsilon_0 \left( \frac{1}{2} \mathbf{E}^2 \delta_{\beta\alpha} - E_\beta E_\alpha \right) + \mu_0 \left( \frac{1}{2} \mathbf{H}^2 \delta_{\alpha\beta} - H_\alpha H_\beta \right) \quad (10)$$

を導入する。法線方向が  $n$  の面に及ぼす応力が

$$\mathbf{P} = \mathbf{T} \cdot \mathbf{n} \quad (P_\beta = \sum_\alpha T_{\beta\alpha} n_\alpha) \quad (11)$$

で与えられる。例えば  $x$  方向の電場  $\mathbf{E} = (E, 0, 0)$  の場合, 0 でないテンソル要素は

$$T_{xx} = -\frac{\epsilon_0 E^2}{2}, \quad T_{yy} = T_{zz} = \frac{\epsilon_0 E^2}{2} \quad (12)$$

であり, 電場の方向に張力, 垂直な方向に圧力が働く。伝統的に電磁場 (のある空間) を連続体 (弾性体) と見なす立場では, これを Maxwell 応力と呼び, Coulomb 力などの力を説明している。

運動量密度の連続の方程式 このテンソルを用いると (7) は以下のように書ける :

$$\frac{\partial g_\alpha}{\partial t} = -\sum_\beta \partial_\beta T_{\beta\alpha} \quad \text{あるいは} \quad \frac{\partial \mathbf{g}}{\partial t} = -\nabla \cdot \mathbf{T} \quad (13)$$

あるいはガウスの積分公式により, 固定された任意の閉曲面  $S$  で囲まれた部分に対して

$$\frac{d}{dt} \int_{S \text{ 内}} \mathbf{g} dV = -\oint_S \mathbf{T} \cdot \mathbf{n} dS \quad (14)$$

となる。右辺は閉曲面  $S$  にかかる力 (ベクトル) であり,  $\mathbf{g}$  が運動量密度であることが分かる。

電磁波のエネルギーと運動量流  $z$  方向に進む平面波で  $\mathbf{E} = (E, 0, 0)$ ,  $\mathbf{H} = (0, H, 0)$  の場合

$$\mathbf{T} = \begin{pmatrix} -\frac{\epsilon_0}{2} \mathbf{E}^2 + \frac{\mu_0}{2} \mathbf{H}^2 & 0 & 0 \\ 0 & \frac{\epsilon_0}{2} \mathbf{E}^2 - \frac{\mu_0}{2} \mathbf{H}^2 & 0 \\ 0 & 0 & \frac{\epsilon_0}{2} \mathbf{E}^2 + \frac{\mu_0}{2} \mathbf{H}^2 \end{pmatrix} \quad (15)$$

となる。電磁波では  $\epsilon_0 \mathbf{E}^2 = \mu_0 \mathbf{H}^2$  であるから, 0 でない要素は  $T_{zz} (= u)$  のみとなり, 進行方向に垂直な断面で, 面に垂直な方向に圧力

$$P = u = \frac{\epsilon_0}{2} \mathbf{E}^2 + \frac{\mu_0}{2} \mathbf{H}^2 \quad (16)$$

が働くことが分かる。<sup>2</sup> この場合,  $\mathbf{g} = (0, 0, g)$  として, 連続の式は先に得られた関係  $u = cg$  を用いて

$$\frac{\partial g}{\partial t} = -\frac{\partial}{\partial z} gc \quad (17)$$

となり, 運動量の流れの密度が  $gc$ , つまり 運動量も  $z$  方向に光速  $c$  で運ばれる ことが分かる。

これが光子 (フォトン) のエネルギーと運動量の関係 「 $E = cp$ 」に対応している。固体中の格子振動の粗密波を音波とみなして量子化したフォノンについても,  $c$  を音速として同様の関係が成り立つ。(→[251])

<sup>2</sup> 電磁波がいろんな方向に等方的に飛び交う空洞放射 (光子気体) では, 単位時間に単位面積を通過する運動量を計算すれば, 平均されて  $P = u/3$  になる。光子気体については → 講義ノート「熱・統計力学 量子力学」, p.46